特集9

北海道におけるカボチャ『黄栗（おうぐり）』の導入ポイントについて

雪印種苗（株）北海道営業課

北海道のカボチャ栽培

北海道のカボチャは年次による変動はありますが、7,000ｈａ程度の栽培面積で国内生産の約５割を占めています。出荷は８～12月の期間となり、10～5月がニュージーランド、メキシコ等の輸入品、６～７月が鹿児島、茨城等の府県産とリレー出荷される中で、夏場～初冬にかけて全国各地に出回ります。

北海道産カボチャの課題は、トンネルやべたがけ栽培により7、８月の早期出荷の割合を高めることや輸入品と競合する11～12月に出荷される貯蔵カボチャの品質管理を徹底することが望まれます。また栽培面からは省力栽培の取り組みが進み、セル苗の利用や機械による定植などが実践、検討されています。省力栽培に対応する品種も必要とされています。

８月上旬収穫の濃緑色の『黄栗（おうぐり）』

北海道での『黄栗』導入ポイント

『黄栗（おうぐり）』は試作開始より３年目となり、一部の産地に導入されています。早期に収穫できて収量性が高い、そして粉質系であることが評価されています。

以下に『黄栗（おうぐり）』の試作結果と導入のポイントについて整理してみました。

1.早出し出荷に有利な『黄栗（おうぐり）』

北海道産カボチャは7、８月の早期出荷が望まれており、ハウスやトンネル栽培、べたがけによる露地栽培により作型を前進させ、早生種を使って、より一層の早出しを行っています。しかし、早生種は中早生～中生種に比べ収量性が低く、果皮色も淡い傾向にあります。

『黄栗（おうぐり）』は蔓の伸びが早く、低位節より開花、着果が始まり、また肥大も良好な早生種です。5月下旬の鉢苗定植のべたがけ・露地マルチ栽培で８月上～中旬の出荷も可能となります。また低温期の着果性も良好で樹がしっかりと出来ている場合は、5、６玉の大きさの果実が株に２～３個着く多収な品種です。果皮は濃緑色で、この時期のカボチャとしては色濃く見栄えがします。

二本に仕立てた草勢のおとなしい『黄栗（おうぐり）』

2.省力栽培に向く『黄栗（おうぐり）』

近年、省力化とコスト削減のためセル苗定植栽培が道内の各産地で増えています。セル苗定植は作業の効率が良く、着果位置が低節位に集中するため一斉収穫適性が高いとされるなど、多くの利点があります。その反面、子葉二枚～本葉展開期始めの若苗で定植するため、樹が出来過ぎてしまい、着果が安定しない場面も散見されます。

『黄栗（おうぐり）』は樹がおとなしく、セル育苗定植でも樹の出来過ぎによる着果不良が少ない傾向にあります。また側枝の発生も少なく繁茂しづらいため、蔓が果実に当たり発生する蔓傷も少なく、管理が容易です。おとなしい樹勢を利用してやや密植栽培とし、株数、果数を増やし収量を上げている例もあります。

着果位置が集中し、収穫しやすい『黄栗（おうぐり）』

3.収穫・出荷作業が容易な『黄栗(おうぐり)』

北海道の農産地は夏～秋に掛けて作物の管理や収穫作業が集中します。そのため時間と労力の兼ね合いからカボチャの収穫も一斉に行なうことが多くなっています。

『黄栗（おうぐり）』は着果位置が低節位の10節前後で株元より60～80ｃｍに一番果、そして二番果が近い節に着果します。そのため、熟期が均一となり一斉に収穫しやすいことや着果位置が集中しているため、収穫時の畑内での移動が少なく労力面からも評価されています。また、果実の大きさや形の揃いが良く規格分けや箱詰め作業が容易であることも報告されています。

4.食味のばらつきが少なく、粉質の『黄栗（おうぐり）』

『黄栗（おうぐり）』は極粉質ではありませんが、粉質系で甘味の強い美味しいカボチャです。着果が揃い一斉に収穫しやすいことから、収穫物の食味も個体間の差が少なく、当たり外れがないことも利点の一つです。内部の果肉は肩部～赤道部にかけて特に肉厚でカット販売でも見栄えがします。市場の評価も上々です。

以上、新品種『黄栗（おうぐり）』の道内の栽培利点につきまして紹介しました。９～11月出荷に最適な『北里（ほくり）』と合わせてご利用して頂きたくお願い申し上げます。

果実の揃いが良好な『黄栗（おうぐり）』

楕円形で肉厚な『黄栗（おうぐり）』